

日本の文学作品を見る・第二部

—藤村と康成—

42期生

I テーマ設定の理由

昨年、同じテーマで、夏目漱石、志賀直哉、芥川龍之介の三氏の作品について、いろいろ調べてみた。夏休み前に文庫本を何冊も読む機会があって、そのとき湧いてきた文学的興味から始めたものだ。しかし、研究を終えた後、どうも読み足りない気がしてならなかった。そこで、今年はその続編として、別の作家の作品を読んでいくことにした。試行錯誤の末、作家は島崎藤村と川端康成の二氏に決定した。

II 研究方法

- (1) 作品を選ぶ。
- (2) 作家自身について調べる。
- (3) 作品を読み、内容を理解する。
- (4) 表現技法を探す。
- (5) 作品の特徴を見つける。
- (6) (3)~(5)をまとめ、作家の作風、主観等を読みとる。
- (7) 以上を二人の作家について行い、第一部もふまえてまとめる。

III 研究内容

1. 第一部の概略

今年の第二部の話に入る前に、第一部で調べたことを簡単にまとめておく。

第一部では、夏目漱石、志賀直哉、芥川龍之介の三氏について調べた。

夏目漱石については、僕は初期の作品にこだわった。漱石の漱石らしさが出ているからだ。『吾輩は猫である』や『三四郎』などがそれだが、文学作品というイメージに比べると随分軽い作品である。また、「吾輩は」「おれは」「余は」と、主人公が読者に語りかけるような文章で書かれている。とにかく、いわゆる文学作品とは一味違った親しみ易い作品ばかりなので、ぜひ読んでいただきたい。但し、『草枕』は、やたらと難しい漢語を使った「ひけらかし」の作品であるから、いちいち辞書をひかないと細かいことは分からない。分かる言葉から大筋をつかんで、あとは自分の感性を頼りに頭の中に映像をつくりあげていくほうがよっぽど楽しめる。

志賀直哉の作品は短編が多く、長編は唯一『暗夜行路』だけである。直哉の作品に共通するのは、的確な描写と、簡潔な文体によって築かれる直哉文学の世界である。そこに描かれているのは「人間のあるべき姿」とでも言えればいいだろうか。そして、直哉の作品を読むと、心が洗われるような気がする。

芥川龍之介の作品には、古典を題材とした、いわゆる「説話文学」がいくつかある。『羅生門』『鼻』『芋粥』などがそうである。そのほかにも彼は多数の短編を書いている。それらには、それぞれにテーマがある。論点がはっきりしていて、今の世の中を風刺しているようである。

2. 川端康成

康成は、明治32年6月11日、大阪市天満此花町に生まれた。出生時こそ、彼は恵まれた環境で生活していたが、それはたちまち崩れた。それというのも、1歳で父、2歳で母、7歳で祖母、そして15歳で祖父を亡くし、全くの独り、つまり孤児となってしまったからである。この事実は、彼の作品を語るうえで重要なことである。

〈雪国〉

国境の長いトンネルを抜けると雪国だった。夜の底が白くなった。

この冒頭のくだりは余りにも有名である。島村という男が、東京から列車に乗り、二度目の越後湯沢に訪れようとするところから、この話は始まる。冒頭のこの描写は、短いながらも場面を的確にとらえることのできる、名文である。

汽車の中で、島村は「夕景色の鏡」を見つける。これは本物の鏡ではない。夜、ルームライトをつけながら自転車を運転すると、顔がフロントガラスに写ってしまって運転がしづらい。それと同じように、列車の窓に、葉子という女性が写っていたのだ。

鏡の底には夕景色が流れていて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのように動くのだった。登場人物と背景とはなんのかかわりもないのだった。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合いながらこの世ならぬ象徴の世界を描いていた。殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時には、島村はなんともいえぬ美しさに胸が顫（ふる）えたほどだった。

この世界は康成の特徴である。康成は「融け合い」の世界を最大限に活用している。「雪国」には、葉子のほかに駒子という女性も登場する。島村が越後湯沢にやって来たのも、この駒子に会うためだった。この駒子の描写を見てほしい。

細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のように伸び縮みがなめらかで、黙っている時も動いているかのような感じだから、もし皺（しわ）があったり色があったりすると、不潔に見えるはずだが、そうではなく濡れ光っていた。目尻が上りもせず下りもせず、わざと真直ぐに描いたような眼はどこかおかしいようながら、短い毛の生えつまった下がり気味の眉が、それをほどよくつつんでいた。少し中高の円顔はまあ平凡な輪郭だが、白い陶器に薄紅を刷いたような皮膚で、首のつけ根もまだ肉づいていないから、美人というよりも何よりも、清潔だった。

最後の一節は特に重要である。駒子はとにかく「清潔」なのだ。その基準は上の文章からも分かるが、全体として、すっきりしていることが必要のようだ。よく考えてみると、この基準、今年の夏大フィーバーを巻き起こした、秋篠宮紀子妃殿下に当てはまりそうな気がするのだが、どうだろうか。

〈伊豆の踊子〉

大正6年、康成は第一高等学校に入学し、翌年伊豆へと旅立つ。そのときの体験をもとに書かれたのが、『伊豆の踊子』である。

だから、舞台は意識して伊豆に選ばれたわけではない。しかし、この伊豆という温和な舞台は、「伊豆の踊子」、薫を裏によく支えている。伊豆だから、踊子は踊子の本領を発揮したとも言える。

踊子が下から茶を運んで来た。私の前に坐ると、まっ赤になりながら手をぶるぶる顔わせるので茶碗が茶托から落ちかかり、落すまいと畳に置く拍子に茶をこぼしてしまった。あまりにひどいはいにかみようなので、私はあっけにとられた。

（中略）

仄暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出して来たかと思うと、脱衣場のとっぱなに川岸へ飛び降りそうな格好で立ち、両手をいっぱい伸ばして何か叫んでいる。手拭もないまっ裸だ。それが踊子だった。若桐のように足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうっと深い息を吐いてから、ことごとく笑った。子供なんだ。

ちなみに踊子は14歳である。上の踊子の描写を見ると、その無邪気さがよく分かるだろう。この踊子と、『雪国』の駒子を入れ替えてみるといい。湯沢の町でいくらはしゃいでみても白けるし、伊豆の温かさなら、「すっきり」より「ほんわり」だろう。人の心は、そう簡単には解凍できない。しかし、何げないところにその方法はある。この話で「私」は、「自分の性質が孤児根性で歪んでいるときびしい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪えられないで」伊豆に来た。この憂鬱の心を「解凍」したのは、駒子らがくり返した「いい人ね」という言葉である。何げなく言った単純な言葉は、「私」には、「感情の傾きをばいと幼く投げ出してみせた声」に聞こえた。素直な踊子たちと接していく過程で「私」の心が変わっていく様子に着目したい。

〈古都〉

康成は戦後にも数々の作品を書いている。『古都』はその中の一つである。

康成はこの作品を「私の異常な所産」としている。その理由には、執筆中の眠り薬の乱用が挙げられる。服用をやめるとたちまち禁断症状を起こし、十日ほど意識不明だったほどだ。しかし、この作品は、ノーベル賞受賞時に『雪国』などとともに高く評価された作品である。つまり、『古都』は確かに異常な所産ではあるが、異常さはむしろプラスに働いたのである。

『古都』の文章は美しい。『雪国』や『伊豆の踊子』にもそれはいえるが『古都』は特に美しく感ずる。それは会話文が京都弁であることと、ひらがなや和語が多用されていることが関係していると思われる。

この小説は京都を舞台にして、一方では京都の年中行事絵巻が繰り広げられ、他方では京都各地の名所案内記も兼ねている。そんな中で、一卵性双生児、千恵子と苗子の物語。現在に近いから、親しみ易い作品に仕上がっている。

〈文体〉

ミネラルウォーターが最近流行っている。つかえるものがなく、純粹に水の味が楽しめる。志賀直哉の作品はこれに当たる。このミネラルウォーターを使って煎茶を入れると、康成の文章になる。

まともなミネラルウォーターは、それ自体おいしい。しかし、それを使って飲み物をつくると、互いに引き立てあって、素晴らしくいいものができる。小説も同じだ。

煎茶は日本的である。酒のように酔ってしまうことはないが、飲んだ後がひじょうにすっきりとする。

康成の小説もそうである。ひじょうにすっきりとしている。そして、日本語の美しさを最大限生かしている。特に康成は「ぼかし」や「省略」を多用し、日本語最大の特色である「曖昧」の世界をつくっている。

3. 島崎藤村

藤村は明治5年3月25日、現在の長野県木曾郡山口村に生まれた。そして第二次世界大戦中の昭和18年に亡くなっている。康成の約30年前を生きた人間である。彼の作品群は、いずれも存在することの意味を賭けた生の証言であり、成るべくして成った必然の作として、誠実な魂の記録を綴っている。

〈藤村詩集〉

まず彼は詩人であった。彼の出版した詩集をまとめたものが、今は『藤村詩集』として出版されている。序文に彼は「遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。」と書いている。この言葉には、詩人島崎藤村の数々の思いとともに、青年島崎春樹（本名）の無限の思いがこめられている。『藤村詩集』のどのページを開いても、そこに新しい時代の感情の声を聴くことができるし、青春の生命のあらわれを見ることができる。とくに『若葉集』では、彼は多くの清純な恋愛詩をあらわしている。

彼の詩に共通するテーマは「青春の永遠性」ということである。彼一人の出来事であり、また考えであることが、詩にすることで、ひろく一般的になり、また時が過ぎてもその世代の若者に伝わるものになっているのだ。

〈破戒〉

そうして彼は小説への道を歩む。その中でまず押さえるべき作品は『破戒』である。主人公は瀬川丑松という教員なのであるが、彼は、実は穢多、つまり部落出身者なのである。題の破戒とは、読んで字のごとく「いましめを破ること」である。丑松は、世間の矛盾と重圧から、父の戒めを破り、隠していた自分の身分を打ち明ける。

この小説を読むときのポイントは二つ。一つは丑松の心境変化に着目することだ。そしてもう一つは、丑松が自分の素性を明らかにした後の、周囲の人々の反応に着目することだ。最初から読んでくれば、ここで何か感じるはずである。何かは人によって違うだろうから触れずにおく。しかし、所々に人間の醜さが見えることは確かだ。

なお、この小説の見解として、「一種の社会小説である」というものと、「丑松の姿に『言い難き』自己告白を仮託したものだ」というものがある。

〈自伝的小説〉

『破戒』の後、藤村は自伝的小説をいくつか残している。『春』『新生』『夜明け前』などがそれである。

『春』の結末の部分に、「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」という、岸本（主人公、つまり藤村の分身）の独白があるが、この言葉は、彼のその他の作品群の根底に流れる「隠れた主題」である。そして、自伝的小説であることを考えると、これは藤村自身の思いでもある。藤村の作品を読むときは、これを注意して読んでほしい。

4. 文学の中の女性

しめくくりとして、これまで調べた内容から、文学における一つの傾向をまとめてみようと思う。文学作品中の女性についてである。

女性が出てこないものは論外として外すと、文学作品は、主人公の男女により大別できる。

主人公が男性のとき、その小説には若い女性が登場する。その女性はまず主人公のマドンナ的存在である。つまり、主人公はその女性に好意を抱く。物静かで落ち着いたその女性は、ありがたいことに主人公を嫌ってはいない。

主人公が女性となるとやや傾向が違ふ。女性そのもの（特に主人公）は、主人公が男性のときと変わらないが、作品自体に、女性の「思いやり」や「優しさ」の色が濃くなっている。

女性全般として考えると、若い女性は二パターンに分かれる。働き者か、あるいはお嬢さまかである。いずれにせよ、男性を慕う設定が多い。おばさんになると、働き者の人が多くなるが、やはり男性を自分より上に位置づけている。

「優しく落ち着いた女性」ばかりが明治・大正の世にいたとは考えにくい。なのにこういう女性ばかり書かれるのはどういうわけか。僕は二つの理由を考えた。

一つは、「男尊女卑」という考えである。「女性の色気は男性を惑わす」として、男尊女卑の考えができてきた。今でこそ、この矛盾に気付いた人々が平等権を訴え、それが認められるようになったが、明治・大正の世は、選挙制度などにも見られるように、まだこの考えがあった。近代文学には、それが顕著に表れているように思う。

もう一つは、作家自身の求愛感情や理想の表れということである。このころの作家の大半は男性で、今まで読んできたのも男性の作品だ。男性というものは、本能として求愛感情をもっている。それが文章に表れてくるのだろう。

ところで、今の女性は強さをもった。しかし、それは「男女平等」でない。昔の逆ではいけない。万人が協力し、権利も、愛情も、互いに同じくらい持たないといけな。しかし、男女の相違は構造だけではない。両性が協調して様々なことをする中で、ちらりと見える優しさ、たくましさ、愛情、誠意……。それが大切なのである。人間は、強さを持つと破滅する。そう思う。

文学作品を読むと、その辺りははっきりと感じられる。みんなも読んで、それにぜひ気付いてほしい。

IV 結 論

文学は、単なる字の羅列ではない。そこに、厳しさあり、喜びあり、寂しさあり、楽しさあり……。人がつくった、人らしい世界。誰の作品についても、それは言える。素晴らしいかどうかは、読んだ人が決めることだ。だから、読んでみないと始まらない。文学は全くのホントではなく、全くのウソでもない。その世界を気楽に覗いてみるのが大切なのである。

確かに、直接的に文学は生活に関係ない。しかし、文学を楽しむことで、余裕ある生活もできるし、ときには自分の悩みを解決してくれる。文学に親しんで、損することはない。二年間いろいろ読んできて、そう思った。

文学が消えた世界……それは考えられない。

V 反省・感想

去年、今年と、二年にわたって、文学にひたってきた。今年の作家は、去年より多少のレベルアップを考えて選んだ。しかし、レベルアップがきつすぎて、とくに島崎藤村の作品については、難しくってしょうがなかった。

ひとつ思ったことがある。文学は仕事で読むものではない。楽しむものだ。文庫本なら安いし、気楽に読める。自由研究は終わったが、これからもどんどん文学作品を読んでいこうと思う。

あと、とにかく自分の理解できる作品に頼ったので、意見が偏ってしまったかもしれない。そのへんは了承してもらいたい。

VI 参考文献

- | | | | |
|---------------|-----------|------|-------------------|
| ・雪国 | 川端康成 | 角川文庫 | 1956年(1935~47年) |
| ・伊豆の踊子・禽獣 | 川端康成 | 角川文庫 | 1951年(1926年) |
| ・古都 | 川端康成 | 新潮文庫 | 1968年(1961年) |
| ・藤村詩集 | 島崎藤村 | 新潮文庫 | 1968年(1897~1901年) |
| ・破戒 | 島崎藤村 | 新潮文庫 | 1952年(1906年) |
| ・春 | 島崎藤村 | 新潮文庫 | 1950年(1908年) |
| ・新潮日本文学アルバム 4 | 島崎藤村 | 新潮社編 | 1984年 |
| ・ 同 16 | 川端康成 | 新潮社編 | 1984年 |
| ・新訂 国語便覧 | 浜島書店編集部編著 | | 1987年 |

※注 西暦年は初版年、但しカッコ内は作品の発表年。